

瓦のミカタ 入門講座

岡山市教育委員会文化財課 要川原野

1.はじめに

今年1月、東区万富東大寺瓦窯跡で東大寺サミットが開催されます。これにあわせて、今年度の埋蔵文化財センター定期講座は「瓦」をテーマとします。

瓦は中国大陸で出現しました。その後、紆余曲折を経て、朝鮮半島を經由し、飛鳥時代に日本へ伝来しました。瓦は、寺院、宮殿、官衙、城郭など重要な建物に使用され、近世には棧瓦の発明により、その使用範囲は一気に拡大し、近現代には葺き材として一大勢力となりました。

本発表では、瓦について考える際に基礎となる内容を主とします。具体的には、瓦に関する用語、製作工程の確認、通史、の3点です。これを聞くことで今年度のセンター講座の内容がより理解しやすくなることを目標とします。よって必然的に（残念ながら？）、岡山の瓦の具体的状況については簡単に触れる程度になりますのでご了承ください。

2.瓦とは

ざっくりした定義：屋根に葺く建材で、主に粘土を焼成したもの

葺き材以外→塼、海鼠壁、瓦積み基壇

焼物以外→金属（銅、鉛）、石、木

3.瓦の種類と部分名称

3-1.瓦の種類

本瓦葺き：丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦（図1・6）

棧瓦葺き：棧瓦、軒棧瓦（図5・7）

道具瓦：鬼瓦、鴟尾、鯨、獅子口、隅木蓋瓦、熨斗瓦、面戸瓦、垂木先瓦、など（図6・7）

その他：滴水瓦（軒平瓦の亜種）、施釉瓦、金箔瓦、文字瓦、など

本発表の対象：丸瓦・平瓦・棧瓦、および各々の軒瓦

※学術的名称と歴史的・慣用的名称→表1

3-2.文様と部分名称

丸瓦・軒丸瓦：（図8）

端部形状による違い：有段（玉縁式）と無段（行基式）（図1・2）

瓦当文様：蓮華文、巴文、文字、梵字、仏像、家紋、など

蓮華文（図10）：単弁と複弁

単弁：無子葉（素弁）、有子葉（単弁）、二重子葉（重弁）、

文様区：内区、外区、中房、外区内縁、外区外縁（図8）

文様要素：蓮子、蓮弁、珠文、圏線、（面違い/線）鋸歯文（図8）

部分名称：凹面、凸面、玉縁部、瓦当部、瓦当面、瓦当裏面、

平瓦・軒平瓦：(図9)

瓦当顎部：直線顎、段顎、曲線顎 (図3)

瓦当文様：重弧文、忍冬文、唐草文、剣頭文、巴文、文字、など

唐草文：忍冬唐草文、変形忍冬唐草文、偏行唐草文、均整唐草文、葡萄唐草文 (図11)

文様区：内区、外区、脇区 (図9)

文様要素：珠文、中心飾 (図9)

棧瓦・軒棧瓦：諸要素は基本的に丸瓦・平瓦に準ずる

向き：右棧瓦(一般的)、左棧瓦(特殊。高知や出雲、倉敷など?)

4.作り方

基本の流れ

(4.1)原料調達：粘土採取

(4.2)成形・文様・調整：形作り→(軒瓦)文様をつける→仕上げの調整

(4.3)乾燥・焼成：窯で焼き上げる

(4.4)葺く

4-1.原料調達

原料となる粘土を採取→調合、捏ねる、寝かすなどで状態を整える
→胎土観察などで同定・区別可能の場合も

4-2.成形・文様・調整

丸瓦平瓦共通

成形前段階：粘土紐と粘土板

粘土板切り取り：糸切(コビキA)と鉄線切(コビキB)

成形：平瓦と丸瓦で後述の通り。

瓦当文様：手彫り・スタンプ状(初期のみ)、木製の型(范傷や彫り直しが確認可能)

例外：陶製(中国の長安城など)

叩き締め(凸面)：タタキ板、格子目、斜格子目、縄タタキ (図15)

型はずし(凹面)：型に布を敷く→布目痕 / 型に砂を撒く→ハナレ砂

※凹型台使用の場合、上記凹凸面は逆転する

調整：未調整、ナデ、ケズリ、ハケメ

丸瓦

成形方法：桶巻作り (図14)

軒丸瓦：瓦当部成形法→別作り接合と一体成型

奈良時代における一本作りの出現 (図 12)

平瓦

成形方法：桶巻作りと一枚作り (図 14・13)

奈良時代における一枚作りの出現⇔中国・朝鮮半島・沖縄では桶巻作りが近現代でも継続

軒平瓦：瓦当部成形法→別作り接合と一体成型

4-3.乾燥・焼成

窯の種類：窖窯（登り窯）、平窯、達磨窯

窖窯（登り窯）：地下式と半地下式と地上式、燃焼室と焼成室の間の段の有無、焼成室の階段の有無

瓦陶兼業窯：須恵器窯で瓦を焼く→瓦生産の増減に対応しやすい

平窯：地下式、半地下式、有畦式 (図 16)

達磨窯：有畦式平窯の変形で、焼成室を2つの燃焼室で挟む構造

4-4.葺く

固定方法：粘土（葺土）、漆喰、突起（引掛用）、釘穴、鉄線

4-5.注意点

生産時点（窯跡）と供給先（建物）：どの地点・時点を考えているか

移動：工人か、瓦范か、それとも単なる模倣か、→単純な「似ている」では不十分

研究史の長さ：固有名詞化した用語と研究の進展の齟齬

5.通史

5-1.中国大陸

龍山文化期：瓦の出現？（従来は西周時代初期頃と考えられていた）

龍山文化期（B.C.3000～B.C.2000年）にまで遡る資料（図 17）

丸瓦：断面半円形 平瓦：断面凹字形

西周初期：粘土紐積み上げ、桶無、土管状に作成して分割、**平瓦断面弧状**、

西周中期：半瓦当丸瓦（半円形の瓦当）の出現（図 18）、重環文や雷文、動物文、樹木文など

春秋時代：秦、平瓦断面凹字形、丸瓦端部は有段無段混在、丸瓦凸面に縄タタキ目

秦・漢時代：軒丸瓦製作法の変化、**円瓦当の出現**（遡る資料あり？）、蕨手文など

模骨桶の使用開始、一本づくりと別作り接合の2種

平瓦製作法：前漢初頭に円筒桶粘土紐、後漢に粘土板が出現

五胡十六国時代：模骨桶粘土紐、中国東北部で4世紀代には出現か

波状文の軒平瓦が出現（図 20）

北魏平城期：**蓮華文**の出現（複弁）（図 19）

軒平、指ひねりから工具刻みへ（図 21）

北魏洛陽期：**複弁蓮華文**

北朝：軒丸接合刻み多い、模骨桶粘土紐

南朝：軒丸瓦、人面文→雲文→獸面文→単弁蓮華文

蓮弁の中央に稜線を有するものが多い

円筒桶粘土板・模骨桶粘土板から**模骨桶粘土板**へ統一

随：模骨桶粘土紐（北朝系を引き継ぐ）、施釉瓦の出現

唐：模骨桶粘土紐、蓮華文軒丸瓦、単弁・複弁が混在、蓮華文外区に珠文

揚州地域：随唐代においても南朝系を引き継ぎ、模骨桶粘土板

5-2.朝鮮半島

前漢時代：楽浪郡で瓦の利用あり、漢と酷似

高句麗（図 22）：4 世紀前半頃出現、楽浪系を引き継ぐ、模骨桶粘土紐、輻線で 6 分割する蓮雷文

百濟（図 23）：

漢城時代：平瓦製作技法、5 分類すべて存在する、国際的

軒丸瓦も幾何学文、樹木文、獸面文、単弁蓮華文など様々

熊津時代：南朝の梁の影響、八弁蓮華文軒丸瓦

泗泚時代：模骨桶粘土板、単弁蓮華文軒丸瓦、→日本・飛鳥寺へ

新羅（図 24）：

古新羅：南朝、高句麗、百濟の影響を受ける、有軸素弁蓮華文軒丸瓦（南朝由来？）

統一新羅：鳥や動物、宝相華など華麗な文様、文様塼の大量生産と多様化、円筒桶粘土板

高麗：新羅系統、徐々に単純化、軒平瓦は滴水瓦の影響を受ける

5-3.日本

日本への伝来

崇峻天皇元年（588）、百濟から技術者などの派遣を受ける。その中に「瓦博士」（日本書紀）あり。

→飛鳥寺の造営。6 世紀末までにはほぼ完成か。

〔軒丸〕2 系統の軒丸瓦の存在→二人（系統）の瓦博士か（図 25）

A：弁端切り込み、行基式、瓦当裏面ナデ、いわゆる「花組」

B：円端点珠、玉縁式、いわゆる「星組」

〔軒平〕軒平瓦の出現（軒部を波状にひねるものなどは中国大陸・朝鮮半島に既に存在）

法隆寺若草伽藍が最古段階、忍冬文、手彫りと型押し of 2 種（図 26）

620・630 年代、多様化

須恵器窯で瓦を焼く（瓦当兼業窯）

→山城隼上り窯、山城幡枝窯、河内楠葉窯、播磨高丘窯、（備中末ノ奥窯も同時期？）

→北野廃寺、豊浦寺、四天王寺、奥山廃寺

〔軒丸〕

新羅系の有稜単弁蓮華文の出現→隼上り窯、穴太廃寺、豊浦寺、など

百済系に加え新羅系の参入 + 生産地・工人の多様化 → 様々な要素が混じる

7c 中葉～後半、全国へ拡散 (≡白鳳時代)

蘇我氏系統一指揮下→政府直属工人集団による統一指揮下の造瓦と各地での状況に応じた造瓦

全国各地へ造瓦技術が拡散、在地豪族など各地での寺院造営

〔軒丸〕 (図 27)

複弁蓮華文の流行、内外区の発生

「山田寺式」有子葉単弁、外縁に圈線、玉縁式、重弧文軒平と対応

「川原寺式」面違鋸齒文縁複弁蓮華文軒丸瓦

「法隆寺式」再建法隆寺西院創建時、複弁 1 単位の簡略化、線鋸齒文、他は川原寺式に同じ

「紀寺式」外区に雷文

「本薬師寺式」外区が外縁（鋸齒文）と内縁（珠文）に分離、藤原宮所用軒丸瓦の文様構成につながる

「大官大寺式」大きい、外区が珠文のみ、薬師寺式に類似

〔軒平〕

重弧文の流行、川原寺式や山田寺式と組む (図 28)

「法隆寺式」忍冬唐草文、斑鳩地域で多様→各地へ (図 29)

唐草文：内区と外区の明確な分離、偏行唐草文が流行、均整唐草文の出現（大官大寺造営時）、

藤原宮造営、宮殿建築へ

宮殿に瓦葺が採用される→従来とは桁違いの生産量

異なる 2 系統の存在

大和各地の窯：粘土”紐”桶巻、偏行唐草文、宮の中樞、唐の造瓦技術の模倣？

他地域の窯：粘土板桶巻、変形偏行忍冬唐草文、大垣・門など

〔軒丸・軒平〕複弁八弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦 (図 30)

奈良時代、平城京遷都

平城宮造営と諸寺の造営→大規模かつ継続的な造瓦活動

平瓦一枚作りの出現と移行：715 年頃には出現、720～730 年頃にはほぼ移行

軒丸瓦一本作りの出現：横置き型一本作り → 主流にはならない

全国への展開：平城宮式と各地独自文様

国府、国分寺、駅家などへの瓦供給⇔在地豪族寺院の造営・修繕等

〔軒丸・軒平〕複弁八弁蓮華文軒丸瓦・均整唐草文が主流 (図 31)

平安京遷都

造営組織の複数・大規模化の弊害→桓武天皇による組織再編など
造東大寺司の廃止と平安宮造営開始→前代からの搬入と平安京周辺での造瓦
平安宮大極殿などで緑釉瓦の使用 (図 32)

平安時代中葉～後半

律令制解体、造瓦技術の衰退、各地での多様化

造国制の開始：当初は「各国での費用負担」、その後「各国内での生産と中央へ供給」とする国も
〔軒丸〕

巴文の出現：平安時代後期、12世紀ごろから盛行し、その後主流を占め続ける (図 33)
〔軒平〕

新たな文様の出現：剣頭文、巴文、など (図 34)

中世

主要生産地：和泉、大和、京、鎌倉

寺院名や仏堂名などの文字瓦が増える

瓦工人の専門化：様々な新技術→吊り紐、面取り、引掛け、など
調整などで成形時痕跡焼失により、技法復元が困難

〔軒丸〕

巴文が主流に、文字瓦も

丸瓦製作に吊り紐の出現：12世紀ごろ (図 37)

〔軒平〕

唐草文が主流に、中心飾りは多様化、剣頭文・連珠文・文字なども多い

瓦当成形法：顎貼り付け、折り曲げ、瓦当貼り付け (図 35)

瓦当周縁面取り：上縁、下縁、顎後縁 (図 36)

瓦当外区無文部の調整：1430年頃～、ケズリ・ナデなどによる丁寧な二次調整

凹型台の使用：あくまで凹面調整用？ 13世紀ごろ～

織豊期

安土城に始まる城郭への瓦葺→装飾性の高まり、鯨、金箔瓦、滴水瓦、家紋瓦 (図 38)

「いぶし」の出現はこの頃か？

粘土板切り取り：コビキA (糸切) →コビキB (鉄線切) の変化

近世

棧瓦：延宝2年(1674)、近江の西村半兵衛が考案？→18世紀中頃から急速に普及
火災対策として江戸での推奨→庶民などへ普及が広がる

6.おわりに（注意点）

- ・上記の通史はあくまで中央の視点が大きい記述。
- ・地域ごとの細かい状況は多様である。
- ・特に九州は独自色強い。
- ・琉球系は省略。中国系の影響だけでなく日本などの影響も受けた独自色のある状況。

〈参考文献〉

- 有吉重蔵 2018『古瓦の考古学』（考古調査ハンドブック 18）ニュー・サイエンス社
- 小笠原好彦 2004「大和紀寺(小山廃寺)の性格と造営氏族」『日本考古学』第 18 号、日本考古学協会
- 岡山市立オリエント美術館 1980『特別展「吉備の古代瓦」展示図録』
- 岡山市教育委員会 2001『史跡岡山城本丸下の段発掘調査報告』
- 齊藤希 2022「中国における最古級の瓦とその分布について」『考古学論攷』（奈良県立橿原考古学研究所紀要第 45 冊）
- 竹中大工道具館 2017『千年の葺 古代瓦を葺く』竹中大工道具館企画展覧会図録
- 奈良国立文化財研究所 1974『基準資料 1：奈良国立文化財研究所基準資料』奈良国立文化財研究所
- 文化庁文化財部記念物課 2013『発掘調査のてびき ー各種遺跡調査編ー』
- 前田清彦 1995「三河国分寺系軒丸瓦をめぐる ー成形台一本造り軒丸瓦の変遷とその系譜ー」『三河考古』（8）三河考古談話会
- 森郁夫 1986『瓦』（考古学ライブラリー43）ニュー・サイエンス社
- 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第 59 冊
- 山崎信二 2008『近世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第 78 冊
- 山崎信二 2011『古代造瓦史 ー東アジアと日本ー』雄山閣